

関東軍情報部と陸軍中野学校の関係—公開された「関東軍情報部50音人名簿」と引揚者「身上申告書」の分析

山本武利

1、関東軍情報部の歴史と組織

「関東軍情報部略歴」(C12122501100)

図 I

「関東軍情報部配置図」

2、引揚援護局作成「関東軍情報部50音人名簿」(国立公文書館つくば分館)

第1プロセス 総数3113人から伍長、軍曹、尉官、佐官の全名簿の抽出

第2プロセス 中野校友会『陸軍中野学校』から中野出身者の名簿索引

第3プロセス 中野出身者の所属、階級などの確定

図 II

秋草俊

図 III

浅野 節

3、関東軍情報部の陸軍中野出身者の配置

ハルピン本部

ハルピン支部

各支部

4、関東軍情報部幹部(将官)に占める中野出身者

松原慶治編『終戦時帝国陸軍全現役将校職務名鑑』

図 IV

解説

1945年6、7月頃に作成された関東軍情報部50音人名簿には3113人が名を連ねている。その人名には所属するハルピン本部の9班やハルピン支部、満州全土とアパカの各支部名が記載されている。各人の歩兵、砲兵などの兵種、嘱託、憲兵などが記載され、そして軍の多様な階層が明示されている。そこには通訳官、打字生(タイプライター)、雇人などの男女の職種もある。

階級の中で伍長、軍曹から少将の範囲の人名をピックアップして、中野学校名簿とつき合わせたところ110名の人物を特定できた。校史によれば、末期の関東軍に所属した中野出は120名としているので、新京の関東軍本部や満州政府機関や満州国軍、領事館などのいたものは10名ほどに過ぎなかった。つまり中野出の90%以上が情報部の所属していたことになる。

彼ら中野出の情報部での地位はどうであったか。表に示されたように、部長の秋草俊（教職）は別格として、2甲の村田武経が筆頭となって、少佐は半分、大尉55人のうち48人を中野出が進出している。大尉の大半は乙Ⅰ（1940年10月卒）と乙Ⅱ（1941年7月卒）である。終戦にならなければ、彼らが2年後には情報部の指導部を完全占拠する勢いであったことが分かる。

ところが中尉以下では3丙（1942年11月卒）、4丙（1943年9月卒）がパラパラといるだけで、中野卒はきわめて少ない。つまり中野の新卒は日米開戦以降、南方に派遣され、満州にはわずかししか来なかったことを示している。この逆三角の人的構造は軍全体で満州が軽視されたことをはっきりと示している。張り子のトラのかっこうをつける程度の新規採用しかなされなくなったわけである。

## 5、主要人物のシベリア抑留状況（1950年現在）

人名	状況
秋草 俊（教職）	49モスクー 50・4・8 16地区受刑
村田武経（2甲）	47・10・30 25年判決
村沢 淳（2甲）	不明
新井三郎（乙Ⅰ短）	49・11 16地区受刑 不明
市川均十（乙Ⅰ長）	45・9・20 ハルピン 不明
江島 毅（乙Ⅰ長）	ハルピンにて武装解除
飯島良雄（乙Ⅰ短）	49・7 カラカンダ 病院入院
木村功一（2乙）	45・10 刑25年 ハバロフスク
野村金慧（乙Ⅱ短）	46・9・10 シベリア 生存
馬場嘉光（乙Ⅱ短）	48・5 刑15年 カラカンダ スパスク
田口喜八（丙2）	48・4 PW ウラジオ 取調べのため
浅野 節	ハバロフスク 生存

「関東軍情報部五十音人名録」による

## 6、帰国者の上陸時に出した「身上申告書」

ケース 原田三郎

### メモ—関東軍情報部50音人名簿から読み取れるもの

- 関東軍情報部は情報機能だけでなく、軍事機能（実践度、編成密度、達成度）を持つ日本陸軍最初で最大のインテリジェンス機関であった。
- この機関の中枢を中野出が支配していた点で、中野のインテリジェンス的貢献度は高かったといえよう。
- この機関の完璧な人名録が見つかった意義は大きい。
- 日ソ中立条約での静謐姿勢をとりつつ、対ソ攻撃を秘めた最大限のインテリジェンス戦を5年間展開した足跡を今こそ検証せねばならない。
- 特別警備隊への再編の時期に開戦となり、本部では無抵抗で降伏、捕虜となった。一部の支部では戦闘に参加したが、かなりの死者、行方不明者出した。
- GHQも1946年4月6日にハルピンの特務機関の機能、方法に関する「詳細な報告」全期間の職員表や書類の提出を求めた。（終連報甲307号）。しかし多くの関係者がソ連に抑留されていたため、代わりに731部隊情報の獲得に専念した。
- ソ連は731部隊の捜査を幹部不在で中断し、逆に多数の関東軍抑留者からその情報を搾り取り、情報部の全容解明をおこなった。

### 参考資料 「関東軍情報部（特務機関）4月21日に慰霊祭」

情報部は日ソ開戦に際し、戦闘死歿および自決を含み特殊工作において多くの殉職者を出し、その数百五十余名に上ったが、さらに終戦とともに、機関長以下、その前歴者に至るまで、ほとんど一名の例外もなく全員ソ領に移送せられ、苛酷な取扱いとともに重罰を科せられた。ソ領に移送されるに先だち満州地域において尊い犠牲となった者は百二十数名に上り、これとほとんど同数のものが、欧ソならびにシベリア、中央アジアの各地で悲憤の最後を遂げた。 『偕行』1957年5月15日、69号

- 総計3113名（180頁に関係者の個人情報凝縮）
- 関東軍全体では130名の中野学校出身者が所属（校史）したが、そのうち110名～120名が情報部に所属した。100名前後がソ連抑留者になり、多数が病死、刑死した。
- 最後に帰国した1956年12月組では中野関係者は63名もいた。
- 1945年7月ごろ作成の名簿を元に第一引揚局と引揚援護局が、関東軍情報部全員の終戦以降の消息を書き加えたもの。女性の記載あり。

- 関東軍時代 所属名 兵種 階級 氏名（生年月日記載もあり） 本籍（都府県別）
- 兵種  
歩、属、野重、属、嘱、憲、通、自操捲手、輜、砲、獣医、銃砲、筆生、小砲、主、衛、エ、
- 階級  
大佐、中佐、大尉、中尉、少尉、准尉、見士（少尉）、兵長、軍曹、伍、上、長、二、一、軍、現役兵、属、自操  
通訳官、通訳生、筆生、打字生、雇人、技雇、技手、
- 所属名に斜線が引かれている場合があるのは、原簿が開戦前に作成されていたことを示す。
- 略字、略号で判読できないところが多い。
- 難点 手書きで判読困難箇所多い  
特に「資料」の箇所は狭いスペースに書き込みを重ねている。

#### 資料としてのメリット

- 本部、支部の配属者の名前、数が判明する
- 陸軍中野学校出身者の配属先が判明する
- 全体の兵種、階級の数が判明する
- 各部署の特性推測可能となる

#### 戦後 資料 抑留地

帰国—㊦  
 行方不明—㊧  
 生存—生  
 死亡—死  
 在留—サ  
 原隊無所属、原隊崩壊—ム  
 健在—健  
 死亡公報済み—公

- ソ連抑留状況の基礎資料
- ソ連のインテリジェンス調査の目的が判明する
- 各将校の生死、抑留先、抑留所などが判明する

○ 満州で戦士した者が若干判明する

図 I

「関東軍情報部配置図」

図 II

秋草俊

図 III

浅野 節

図 IV

関東軍情報部幹部（将官）に占める中野出身者